鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究

桑波田　武志

A Study about the Latter Half of Backed Knife Culture Period in Kagoshima Prefecture

Kuwahata　Takeshi

要旨

1997年の筆者の編年を基軸としてそれ以降に報告された新資料を加え，層位，石器組成，石器製作技術，器種ごとの系譜等の観点から鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の編年（Ⅱ期～Ⅵ期）についての再検討を行った。また，時期が下るに伴う石器の小型化について，規格についての客観的な数値データを基に検証した。また，該期のC^{14}年代測定データから，Ⅱ期～Ⅵ期についての現段階での概ねの年代観について触れた。

キーワード　ナイフ形石器文化後半期，石器製作技術，石器組成，石器の小型化

1　はじめに

筆者は以前，鹿児島県のナイフ形石器文化期について研究の現状・課題について論じ，あわせてＡＴ降灰以降のナイフ形石器文化期（以下ナイフ形石器文化後半期）の編年について触れた（桑波田・宮田 1997）。その中でＡＴ降灰以降の該期の石器群をⅡ～Ⅵ期の５つの時期に細分した。編年を組むにあたっては，石器組成・出土層位に主眼を置き，遺跡間の比較を通して行った。

それ以降，該期の新たな報告書刊行もあり，それらの資料は石器組成，編年の見直し，補充を行うのに充分なものである。そこで本稿では新資料をふまえ，前回課題として残った終末期の石器組成の様相や該期の石器組成全体についての見直し，各器種ごとに系統の補充を図り，鹿児島県におけるナイフ形石器文化期の石器群の推移について述べていくこととする。

2　新資料の検討

平成８年度以降に刊行され，提示された資料について，それぞれの遺跡ごとに様相を示し，検討をしていきたい。

（１）日置郡松元町宮ヶ迫遺跡（第１図）

平成８年度に全面調査が実施され，平成11年度に報告書が刊行された。宮ヶ迫遺跡は谷を挟んで南側に前山遺跡，隣接して東側に枦堀遺跡，また，直線距離で１km東側に仁田尾遺跡と，県内でも有数の旧石器時代として有名な遺跡群の中にある。ナイフ形石器文化期と細石器文化期の２枚の包含層を有する。ナイフ形石器文化期では豊富な器種組成を示しており，既出の該期の石器群の中でも際立っている。

石器は基部加工ナイフ形石器，切出形ナイフ形石器，今峠型ナイフ形石器，台形石器，剥片尖頭器，三稜尖頭器，両面加工尖頭器，石清水型削器[1]などがあり，特にナイフ形石器と台形石器については製作址と考えられるブロックを伴っている。出土層位はいずれもＡＴ火山灰の再堆積層と考えられ，ブロックの形成状況からも推されるように安定した状況で出土しているものと思われる。石器群については概ね同時期と捉えている。

（２）揖宿郡喜入町鮎地遺跡（第2，7，9図）

平成７年度～平成10年度に調査が実施され，平成12年度に報告書が刊行された。細石器文化期と，ナイフ形石器文化期の合計４枚の遺物包含層を持つ。特にナイフ形石器文化期はＡＴ降灰以前の石器群を含む複数の時期の石器群が出土している。なお，ＡＴ下位の石器群は小型の二側縁加工のナイフ形石器，台形石器などが出土している。ナイフ形石器は接合資料もあり，該期の石器製作技術を考える上で非常に貴重な資料である。

ＡＴ上位のＸⅣ層からは剥片尖頭器，台形石器，ナイフ形石器等が出土している。ナイフ形石器には，今峠型と国府系のものとが含まれる。

ＸⅢ層からは三稜尖頭器，ナイフ形石器等が出土している。ＸⅢ層から出土のナイフ形石器には部分加工のもの，三稜尖頭器状のもの，今峠型などがある。

細石器が主体的に出土しているＸⅡ層からは小型のナイフ形石器，台形石器も出土している。両石器群間のレベル的な分離は難しいようである。

鮎地遺跡においては複数のナイフ形石器文化期の包含層が確認されており，それぞれ点数は少ないものの，各層ごとに石器群の顔つきが異なっており，各石器群間の時期差を層位から検証できるという意味で重要である。

（３）大口市郡山遺跡（第３図）

平成５年度に全面調査が実施され，10年度に報告書が刊行された。シラスの二次堆積層と考えられる15cm厚の地層からナイフ形石器文化期～細石器文化期にかけての遺物が出土している。ナイフ形石器文化期に属する遺物の出土は少量であり，剥片尖頭器[2]，ナイフ形石器，台形石器等で